様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１３９０２
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３３０００９５

研究課題名（和文）日韓の教員養成の大学生と児童・生徒への情報ネットのカリキュラムの研究

研究課題名（英文）Study of a curriculum of an information net to university students of teacher education and students of Japan and Korea

研究代表者
江島　徹郎（EJIMA, Tetsuro）

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：１０３３５０７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は，日々進化し，変化していく情報ネットワーク社会において，教員や保護者がどのように児童・生徒に指導できるかを，特に将来の教員や保護者たる教員養成の大学生に着目して，日本と韓国で明らかにすることである。
　児童・生徒を対象にしたカリキュラムと指導法による授業実践は，一部を行うことができた。また教員養成におけるカリキュラムについては，2014年度からは正規の単位互換授業として行っている。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to demonstrate in Japan and Korea how teachers and parents can instruct their students in an ever-evolving, ever-changing information network society. This study particularly focuses on teacher trainee university students, who will be future educators and parents.

研究分野：教育工学，メディア教育

キーワード：教員養成　情報ネットワーク社会　カリキュラム　韓国　国際情報交換

１．研究開始当初の背景

現代の子どもたちは，いわゆる「デジタルネイティブ」であると言える。しかし，教員や保護者は，そもそもこうした子どもの実態への理解が乏しいことがある。
こうした情報ネットワーク社会では，これまでの経験等をベースにした指導では，限界がある。

韓国は，インターネットが非常に盛んに使われている国でもある。教員養成の学生たちが，日韓とも，エスノセントリズムに陥りがちであり，文化と国とを同一視し，切り離すことが難しいという実態が明らかになった。こうした情報ネットワークを使いこなす日韓の大学生たちが，教員あるいは保護者になった際，どのような指導が可能なのであろうか。

日本の公立学校に在籍している日本語指導が必要な外国人児童生徒数は，2012 年 5 月現在で 27,013 人である。このうち愛知県は 5,878 人である。2 位の神奈川県(2,863 人)のおよそ 2 倍である(文部科学省 2013)。

ところが，2013 年春に愛知教育大の入試に合格した受験生のうち 82.4%が愛知県の高校の出身である。愛知県・岐阜県・三重県の東海地区の高校の合計では 90.0%となる。
次に，2013 年春に教員養成課程を卒業した正規教員のうち 95.1%が愛知県内であり，県外は 4.9%に過ぎない。(愛知教育大学 2013)

日本の教員は県や市を単位として採用される地方公務員なので，他の県への異動はほとんどない。

私たちは，そうした将来の教員たちに国際的な感覚を身に付けさせる必要があると考えたのである。

２．研究の目的

本研究の目的は，日々進化し，変化していく情報ネットワーク社会において，教員や保護者がどのように児童・生徒に指導できるかを，特に将来の教員や保護者たる教員養成の大学生に着目して，日本と韓国で明らかにすることである。

３．研究の方法

まず児童・生徒の情報ネットワークの活用の実態を明らかにした。

次に，子どもの心理的・身体的な発達と，ネットワークの活用の関係を明らかにした。

続いて日韓の教員養成の大学生の情報ネットワークの活用の実態を明らかにした。

こうした知見を基に検討・評価し，日韓の教員養成の大学生に対する具体的なカリキュラムと指導法を開発し，実践し，評価した。

４．研究成果

児童・生徒を対象にしたカリキュラムと指導法による授業実践は，一部を行うことができた。また教員養成におけるカリキュラムについては，2012 年度に試行し，2014 年度からは正規の単位互換授業「海外教育演習」となった。

本研究は,毎年春は愛知教育大の学生が晋州教育大を,秋には晋州教育大の学生が愛知教育大を訪問して行う研修をベースにしている。期間はそれぞれ 1 週間程度で,人数もそれぞれ 12 名程度である。本研修は,それぞれ相手の国の小学校で授業を行う実践を行っているのが大きな特徴である。また,インターネットを活用し,学生主体で運営されている。

こうした実践に伴うやりとりに, SNS を活用した。また教員の運営体制についても見直しを繰り返して，より良い方法を見い出すことができた。特に授業実践と参観を有機的に結びつけることを試みた。これは検証の結果,一定の成果を見ることができた。

愛知教育大の学生たちのチームの組織は,基本的に学生たち自らが考える。人選にはほぼ間違いなく過去の研修の経験が重視され,学年はその次である。また過去にリーダーを経験した学生は再度のリーダーを辞退する傾向があるため，多くのリーダーが 2 年生または 3 年生となる。理由は不明だが，日本の学生は，4 年生は夏休みに教員採用試験を受けるため，リーダーになるのが難しいという点もあるだろう。

ここで明らかに認知的徒弟制（cognitive apprenticeship)が見られる。チームの師匠はリーダーではなく過去にリーダーを経験した学生である。彼ら・彼女たちは,「これが最後」という自覚とともに，必死で引き継ぎを行おうとする。例えば「リーダーとはこうあるべき」ということを伝えようとする。
そのため 4 年生がリーダーになってしまうと,うまく機能しないように見える。過去に一度だけ 4 年生がリーダーになったことがあった。筆者らには，彼女に過度に権限が集中したように見えた。

学生たちは多くのことを自分たちで考え,検討し，決断し，実行する。実際には，ごく少数の幹部となる学生たち（多くは 3 回目）が大きな権限を持つ。特にリーダーとなる学生には，とても多くの権限が集中する。しかし，多くの場合，彼女たちは，この権限を独占的に行使しようとはしない。それはリーダーたちが，強く継続性を意識した結果，発達の最接近領域(ZPD:zone of proximal development)を認識しているように見える。

こうした結果は,書籍の他, 主に学生たちの間のコミュニケーションについては，国際学会報告する等した。

本研究はいったん終了するが, 今後は,本研修を終えて社会人となった者や,本研修での授業実践を受けた子どもたちへの調査を継続的に行い,この研修による学習の効果を検証していくつもりである。

最後に，2012 年 5 月の受講学生のレポートから引用する。

私は，小学校教諭として，働くことが夢です。教師になって，学級を運営していく時に

は，お互いを認め合うことの出来る学級作りを目指します。その方法をこの研修から学びました。認め合うというのは，相手のことを理解しようと努力し，歩み寄ることです。子どもたちにとって，それは容易なことではありません。しかし，人として成長していくため，またいずれ社会にでて活躍していく時に，この心を持つことのできる人間であってほしいと強く願います。そして，自分自身も，どんな子どものことも理解しようと努め，常に人として成長し続けられる人間でありたいと思います。また，広い視野を持ち，未来を生きる子どもたちの将来に役立つ教育を行っていける教師となっていきたいです。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

① 高校生のための高大連携によるメディア教育の実践－SPP 講座「メディアを通した情報の送受信“受け手と発信元のズレの認識”」を通して－. 杉浦裕孝，野田正幸，天羽康，山田果林，増田朋美，山本武寿，江島徹郎, 愛知教育大学附属高等学校研究紀要 第 39 号，29-38, 2012，査読無

② グローバル社会におけるコミュニケーション能力と教員養成－6 年一貫教員養成のための大学院カリキュラム－, 江島徹郎，志水廣，土屋武志，吉岡恒生，小塚良孝，杉浦淳吉，中野真志，真島聖子，日本教育大学協会研究年報 30, 235-247，2012，査読無

③ Proposal of teaching material of information morals education based on goal-based scenario theory for Japanese high school students , Kyoko Umeda, Ayako Shimoyama, Hironari Nozaki, Tetruso Ejima, Intelligent Interactive Multimedia: Systems and Services Smart Innovation, Systems and Technologies Volume 14, 521-529, 2012, 査読有

〔学会発表〕（計　２件）

① A Study on Youth Awareness of Tablet PCs from a Perspective of Computer Anxiety: An Investigation of 7th Graders , Kyoko UMEDA, Yuka Takeguchi, Hitomi Saito, Seiji Sunagawa, Hironari Nozaki, Tetsuro Ejima, Toshiyuki Kojima, proc of e-CASE & e-Tech 1249-1260, Nagoya University, JAPAN, April 2-4, 2014

② Legitimate Peripheral Participation in International Exchange in Education in Elementary Schools, Tetsuro Ejima, Hitomi Saito, Kiyoko Majima, Takeshi Tsuchiya, Takahito Ueda, Mari Yamane, Kyoko Umeda, Hong Jae Kang, International Conference for Media in Education 50. Nihon Fukushi University , JAPAN, Aug.10, 2013

〔図書〕（計　２件）

① アジア共通歴史学習の可能性－解釈型歴史学習の史的研究－，土屋武志，梓出版社，2013 年

② グローバル時代に育む関係性， 真島聖子，李榮晩，上田崇仁，梅田恭子，江島徹郎，姜洪在，土屋武志，山根真理，愛知教育大学出版会，2011

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
江島　徹郎（EJIMA, Tetsuro）
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：１０３３５０７８

(2)研究分担者
土屋　武志（TSUCHIYA, Takeshi）
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：２０２７３３０２

佐藤　洋一（SATO, Hirokazu）
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：４０１９６２８３

山根　真理（YAMANE, Mari）
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：２０２４２８９４

上田　崇仁（UEDA, Takahito）
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：　９０３２６４２１

野崎 浩成（Nozaki, Hironari）
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：　８０２７５１４８

梅田　恭子（UMEDA, Kyoko）
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：　７０３４５９４０

齋藤　ひとみ（SAITO, Hitomi）
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：　００３７８２３３

真島　聖子（MAJIMA, Kiyoko）
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：　１０５５２８９６

⑶連携研究者
(　　)

研究者番号：